特報部　FAX 03（3595）6911　Eメール tokuho@chunichi.co.jp

義手・義足で接客のバー

「私たちのチャームポイント♪」

タブー視 打ち破りたい

2日間開店

義手や義足をした女性が接客をするバーが十月下旬、東京・新宿のゴールデン街で二日間だけ開店した。うわさはツイッターなどで広まり、両日ともに満席だったという。障害を前面に出すことには、さまざまな意見が寄せられているが、店に立った女性に話を聞くと、何よりも「タブー視」されることに違和感があるようだ。（沢田千秋）

店の名前は「ブッシュドノエル」。障害がある女性らの写真を撮り続けている映像作家太田康邦さん(四〇)が、親友の男性と企画した。一時間半のワンドリンク制で一人五千円。二日間で六十人以上が来店した。

太田さんは「障害がある女性の生き様への崇拝があるし、しぐさもキュートだと思う」と話す。

接客を担当したのは幸子さん(三七)と琴音さん(三三)＝いずれも通称。幸子さんは小学一年の時、右足を失った。「下校途中、青信号で横断歩道を渡っていたら、過積載のダンプが停止できずに突っ込んできた」。現在の本職はデザイナー。普段は義足で生活している。琴音さんも十五歳の時、車にはねられた。「事故を見た人によると、私が『痛い、痛い、助けて』と言っていたらしいけど、何も覚えていない。集中治療室（ICU）に二カ月間いて、気付いたら右手がなかった。髪を結べないのがつらいかな」とはにかむ。

来店客の傾向は二種類に分かれた。一つは女性やカップルなどで、義手や義足を「かっこいい」と評し、会話を目的に来た。もう一つは、障害に「魅力」を感じるという男性たち。幸子さんは「お客さんの中には、障害がある女性を好きと言う自分は許されるのか悩んでいる人もいた。私は『かわいい女性に会いたい』と、メード喫茶に行くのと同じノリでいいと思う」と淡々と語る。

店は「『欠損女子』に会えるバー」として、ネット上で広まった。「堂々として良い」との肯定的な意見がある一方、「障害で商売してる感じがする」「ぶっ飛んだ性癖な人が多そう」などの批判もあった。

「五体不満足」の著者で東京都教育委員の乙武洋匡氏は自身のホームページで「〝欠損萌え〟はNGなのか？」と題したブログを掲載した。「人にはそれぞれ好みがある」「障害はまだまだ身体的特徴と捉えられていない」と記述。「〝欠損萌え〟に抵抗を感じるのはいたって自然だと思う。かと言って、〝欠損萌え〟という感情を抱く人々に対し、後ろ指さして、あれこれ言うことも違う。しょせんは他人の性的嗜好。第三者がどうこう言う筋のものではない」と指摘した。

「欠損女子」という言葉について、琴音さんは「もうちょっとポップな言い方があればなあ」と笑う。「私たちを不幸だと勘違いしてる人がいる。周りが思ってるほどかわいそうでも不幸でもない」。幸子さんは「義足は私という人間を覚えてもらうための特徴でありチャームポイント。個性として受け入れてくれればうれしい」と言い切る。

日本福祉大の木全和巳教授（障害者福祉論）は「かつては障害者が生きるすべとして自分の体を見せ物小屋で売り物にしていた。今回の店には見せる側の自己主張や権利があり、仕方なくやっていた時代とは違う。性的嗜好や価値観が多様化し、隠されていたジャンルが表面化したという意味でも新しい。ただ、ジェンダー的視点では、義足や義肢の男性が接客する店もあっていい」としている。

太田さんは、年明けにも店を再開することを考えている。「障害がある人みんなが表に出るべきだとは思わない。ひきこもる自由はあるし、どうかと思う人がいてもいい。ただ、障害があって表に出たい人が、タブー視されて出てこられなかったことが不幸だった。この店はそれを打破するきっかけになれたと思う」

「ブッシュドノエル」で接客を担当した琴音さん(左)と幸子さん＝東京都新宿区で